

第 5 師団音楽隊は、昭和 30 年(1955)北部方面音楽隊より選抜された 25 名の隊員で帯広において創設された。初演は、同年 10 月である。演奏活動を行っている。隊員は、音楽隊長以下 40 名弱である。内、女性自衛官は、5 名である。平均年齢は、30 数歳である。



年間の部内外演奏回数は、年によって若干の違いはあるが、約 110 回である。部外演奏は、各地のお祭りやイベントでの演奏のほか慰問演奏等も行っており、年間 50 回前後である。部外演奏は各種のイベント支援が多く、それらは、どちらかと言うと土・日に集中しており、隊員は家庭サービスもママならぬ状態である。平日に代日休養を貰っても、子供さんは学校だし、恋人や親しい知人は勤務中であり、デートもママならない。

部内演奏としては、定期演奏会、ファミリーコンサートのほか式典等での演奏があり、式典に荘厳さ・厳粛さを与えている。

隊員は、管内高校や小・中学校生徒の音楽演奏指導もボランティアで行っている。ここ数年、弟子屈町での演奏会前に小・中学生に対し楽器毎の指導を行っているほか、本別町でも同様の指導を計画している。

この様に、音楽隊は、正に陸上自衛隊の部外広報の第一線であり、そして、地域における文化活動の重要な一翼をも担っている。そのレベルは、朔東管内随一であることは誰しもが認めるところである。

さて、我が音楽隊の諸官に、日頃演奏する上で苦勞していることを楽器毎に書いて貰ったので、それを紹介しよう。華麗な演奏服装に身を包み、一見演奏そのものを楽しんでいるかのように見える彼等の知られざる苦勞の程を知って頂ければ幸いであり、違った感慨をもって演奏を聴く事が出来る筈だ。

#### ① Piccolo&Flute(ピッコロ&フルート)

冬期間の屋外で、儀仗等の式典では長時間待機することがあり、材質が木でできているピッコロは、寒さのため管が割れてしまい、毎年のように修理に出しています。ピッコロ&フルートは、穴を押さえて音を出す楽器のため、温度が低い時も手袋をはめると穴を押さえきれないため、素手での吹奏となり指先の感覚がなくなり、いつも凍傷になるのではという心配が頭の中をよぎります。各駐屯地・部隊等の創立記念行事は、少々の雨でも雨天決行で実施されることが多く、特に木管楽器は小火器と違い雨に弱く、キーの裏側についているタンポが剥がれ、再起不能になり修理工場の門を幾度となく叩き、支払いの度に泣いております。

#### ② Oboe(オーボエ)

冬期間、屋外での演奏時、手袋がはけないため、指先の感覚が無くなってしまう。リード(2枚の竹を重ねて作る)を作るのに、2枚と同じ物を作ることが出来ない苦労があり、それ自体の材質・温度等で様々な状況があつて、これまで25年間作ってきてコンサートで使えるリードは数枚だけ?

楽器の練習時間の大半をリード作りに費やして演奏活動に励んでおります。この楽器の特性は、一人で吹くのが多い事と音色(チャルメラ)が変わっているので、大勢の中で吹いていて、ミスしてもすぐバレるので緊張してコンサーHこ望み、コンサートの前は(食事ものどを通らず)痩せる思い(体重は変わらない)をしながら、全身から汗を吹き出して演奏していますので、ソロを聴く時は、その事柄をご理解の上お聞き下さい。

### ③ Clarinet(クラリネット)

(冬) 楽器の指を置く部分(キイー)が金属のため、野外で演奏する時も素手なので凍傷になりそうです。それ以前に、手がかじかんで指が動かなくなり、音もだせなくなる時もあり、儀杖等で整列して執行官を待つ間に、管とキイーが凍って吹けなくなる時や、音を出すのに必需品のリードが寒さのために振動しなくて惨めな音しか出なくなったり、楽器が木で出来ているために「ひび割れ等が生じることもあり」細心の注意をしながら演奏しています。

(夏) クラリネットは黒檀で作っており、キイーを留めるネジを多数埋め込んであるため、デリケートな楽器で温度・湿度の差で左右され、特に夏は目差しが強く、熱を吸収しやすいため「ひび割れ」が生じるので、クラリネットの取り扱いには冬も夏も気を遣います。

### ④ Saxophone(サクソフォーン)

その昔、SAXなんて汽車の窓からマウスピースを出せば簡単に音が出ると、とんでもないことを言った先輩がいた、それも音楽に携わっている者の「言」とは到底信じられない言葉である。それ程軽く見られていることにムカツ腹が立つ、たしかにSAXは誰が吹いても音は出る、音は出るがそれは「音」であって「本当のSAXの音」ではないのである。一人前の「音」になるまでには長時間を要するし、満足な音になるには数年かかる。

個性のある楽器なので、個人々及びメーカーによって異なった音がする、奏者の個性が音に現れる楽器なので相当難しい楽器と言えよう。

5音のSAX吹きには、結構個性のある者が多く「女好き」「酒好き」をはじめマニアックな者、頑固者等多彩な顔ぶれで、面白い人種であり、過去の苦労などは過去のこととして忘れる傾向があり、前向きで上昇志向の強い性格の持ち主が多い反面「他人の言うことは聞かない」「自分の世界に入り込み周りを見ない」「豚もおだてりゃ木に登る的人好し」等も事実であり、実に愉快で爽快な愛すべきSAX吹きの仲間達である。

### ⑤ Bassoon(バスーン)

(冬) バスーンは、メイプル材(楓)で出来ていて木の材質そのものが柔らかいので、他の木管楽器ほど破損は少ない。手袋を着用しながら演奏できないので、素手での演奏となり、楽器は息を吹きかけると表面で水蒸気が凍ってしまう程冷たく、指はまるで長

時間氷に触れているかのよう。

(夏) リード自体が、非常にデリケートなので炎天下の演奏には特に要注意、薄い木で出来ているため乾燥しやすく、割れやすいのが弱点。儀仗や式典等、長時間待機しているとリードが乾燥して音が出なくなるため、小さな水の入ったスプレーを持参してリードに水分補給する。

## ⑥ Trumpet(トランペット)

北海道の特性として、冬の期間が長く、寒さが厳しく特に屋外の演奏時は、困難な時が多いことです。しかし春夏秋冬それぞれの季節感を肌で感じ個人個人が、暑さ寒さに耐えながら自衛官として又、音楽隊員として任務に邁進することは当然の事だと思います。

(夏) 場所によっては、挨拶がひどく楽器の管がザラザラになり、管の表面が傷つきやすい。又、汗でマウスピースがすべり吹きづらい。

(冬) トランペットは金属で出来ている楽器なので、国屋外での演奏時、楽器が凍り、ピストンが動かなくなることがよくあり、特に儀仗等で待機する時トランペット間が長い時、完全に凍ってしまい「栄誉礼」の冠譜の部分が全く吹けなかった事も有り、対策として、ブランディーをピストン部に注入し、凍結予防に心掛けているが、ピストンが動いても口がしばれ、唇が締まらず横から空気が漏れるので、唇を指で押さえながら吹いた事もある。

(演奏会) トランペットは、ミュート(消音器)を使用することが多く、特に静かな曲の時によく使用するが、演奏会の静かな場面で、「カラン・カラン」と大きな音をたてて、ミュートを落として演奏会の雰囲気を変えたことがあり、特にミュートの取り扱いには、細心の注意をしながら、コンサートに臨んでいる。

## ⑦ Horn(ホルン)

ホルンは難しい楽器として知られ、その難しさはなんと、あのギネスブックにも掲載されているほどです。管の長さは約 3.8m にも及び、楽器の中でも一番の長さを誇ります。管が長い割にはマウスピース(唄口)が小さいという特性上、一つの運指で最大 14 個前後の音がでます。倍音の幅が狭いので、コントロールが非常に難しいため、ホルン奏者のプレッシャーは、それはもう並大抵の楽器ではありません。儀仗の中の栄誉礼「冠譜の部分」などはただでもミスは許されない上に、この様なプレッシャーがつきまとうのですから、全国の音楽隊のホルニストは心臓ドキドキ、手に汗を握って吹いているのです。

こんなエピソードもあります。ある日、神父とホルン奏者が同時に天国の門を叩きました。すると、なぜか神父は地獄へ、ホルン奏者は天国への判決が下されました。当然納得がいくはずのない神父が理由を尋ねると、神は一言「お前が仕事(説教)をしている時、皆、居眠りをしていなかったか。それに比べ、ホルン奏者が仕事(演奏)をしている時、周りは皆(音が外れないようにと)ひたすら祈り続けていた」と。これほどまでの難易度ウルトラ C のホルン。しかしながら、どんな編成にも相性バッチリ。様々な場面によって使い分けられる色彩豊かな音色は、他の楽器に類を見ません。楽譜を見れば 9 割は伴奏、いつもスポットライトを横目で睨みながら吹く日々・・・しかし、残り 1 割のスズメの涙ほどのメロディーをホルン全員で吹いた時の雄大な響きといたらもう・・・あ

の目高山脈をも凌ぐほどです。これはやめられません。苦しさの中に光りあり。これがホルンの最大の魅力なのです。

#### ⑧ Trombone(トロンボーン)

(夏) 金管楽器の主たる楽器群は、ピストンを押して音程を作るが、トロンボーンはスライドを移動させて音程を作る特徴のある楽器であり、夏場の野外演奏等では砂埃が最大の強敵で、砂がスライドに付着すると傷がつき、又砂のためにスライドが作動しなくなることがある。特に観覧行進の車両行進の時などは、布きれとクリームは必需品で観客のみなさんに見えないようにして使っております。

(冬) 屋外での演奏時、スライドの部分が凍りシャーベット状態になり演奏不能になったこともあり、事前にブランディー又はアルコール(45 度以上)等をスプレーして凍結予防に努めている。

#### ⑨ Euphonium(ユーホニアム)

(冬) 金管楽器、全てにおいて言えることですが、特に楽器が大きい分「寒い～吹く～水が出る～凍る～演奏不能」という方程式が成り立ちます。演奏時は、事前にヴァルブにブランディー「45 度以上」等を吹きかけ、凍りにくい物「不凍液」等を塗るように心掛けています。特にユーホニアムパートは、曲の中で一人で吹く場面が多く、ヴァルブの部分を素手で暖めて、凍らないように、いつもドキドキしながら演奏しております。

(演奏会) 今年度の、定期演奏会で白鳥の曲をソロで演奏した時は、口が渴き、足が震えて最後まで曲を吹ききれぬかと心配しましたが、どうにか 1 曲吹くことが出来ました。今まで数多くの演奏会で、独奏してきたのに今回に限って緊張したのか、自分なりに分析してみると入校(3 ヶ月)して思うように練習が出来なかったこと、合奏の時に 1 度も満足した演奏が出来ていなかったこととか、反省することばかりで、これからも、毎日が勉強です。

#### ⑩ Tuba(テューバ)

吾が輩は、テューバである。世間般ではあまり名の知られてはいない。図体は大きく、真鍮できています。他の楽器諸君たち(トランペット・クラリネットフルート)よりも動きは鈍い。皆で歌う(合奏)する時も声は低音で、「縁の下の力持ち」などとおだてられる、なんせ図体が大きいため、あちらこちらとぶっつけられて生傷が絶えない。

昔の話であるが、冬の野外訓練検閲なる舞台上で吾が輩の出演を求められた、我が低音の美声を大衆に吹聴せしめようと意気高らかに登壇したが真冬の屋外、気温はマイナス 20 度、せっかくの美声どころか手足がまるで動かない。ご主人様は何を思ったか高級のブランディーを吾が輩の胃の中に注いでくれた、演目 1 曲目は無事ホロ酔い気分、しかし真冬の極寒下、ご主人様の吐く息が真鍮の我が身を、通過する時は水分となり、氷になってしまう。晴れ舞台どころか最悪の舞台、体の中に溜まっていたアルコールも念入りに、介抱(手入れ)をしてくれたが、臭いが最悪。2~3 日は良い香り、しかしそれ以降は悪臭三昧、ご主人様も半年くらいは嘔吐の連続。

他にも寒い冬には、ビニールとかカイロを使って工夫してくれるが一番良かったのは、ご主人様の大きな「素手」で暖めて貰うのが一番と感じた。吾が輩もご主人様の真っ赤

に腫れあがった両頬を暖めてあげたいと思うところである。

#### ⑪ Percussion(パーカッション)

パーカッションは、演奏会では、一人で複数の楽器自由に操り、その楽曲に合った音をならずと言う役割あります。他の吹奏楽器の音は、楽音として聴衆の方の耳に届いていますが、打楽器は、躁音として区別されています。音楽のリズムを刻む事(2拍子や3拍子)は、基本的な事ですが、それ以上にリズムを刻んでいるその音が、演奏されている音楽の雰囲気に合っていないと迷惑でしかありません。描写曲の中には擬音(教会の鐘又は鳥のさえずり)等を使用するような楽曲がありますが、その場合パート全員で、良い音が出る物がないかと、あらゆる場所を探して、その曲に合う物を試行錯誤しながら追求していますが、必要な音がどうしても見つからない時は、自分の声等を使って表現しています。ラテン音楽は、打楽器パートの独壇場で、小物(マラカス・クラベス・ボンゴ)等を使って、身体全体と、かけ声で表現しながら、ホールに居られる皆さんに、南国の雰囲気が伝わる様に、練習に取り組んでいる、パーカッションパートです。

(楽器に応ずる、知られざる苦労話は終わります。情報提供してくれた諸官有難う。)

(次号でも音楽隊を取り上げる予定である。乞う、御期待。)